

〔会員からの感想〕

学校教育の可能性を信じて —逆境こそ学びの好機—から学んだこと

明治大学教育会 笹子 隆雄

2011年3月11日午後2時46分に発生した大地震とその後にやってきた巨大津波は、卒業式を終えたばかりの石巻市立雄勝中学校にも襲ってきました。そして、一瞬のうちに校舎や地域のすべてを奪っていきました。その数時間前には、同校の校長先生が卒業生に向かい「たくましく生きよ」と熱く語った式場であった体育館も破壊され、町は一瞬のうちに瓦礫に埋もれた廃墟となりました。しかし、この甚大な災害にあった同校の学校教育は、1年の間で奇跡の再生を図り、「日本一の修学旅行」を実現し、さらにドイツに渡り、全校生徒による「復興輪太鼓」を最高のパフォーマンスで披露するに至ります。同校の校長として学校教育を展開し、奇跡とも讃えられている一連の学校経営と、さらに新設校における学校教育創造に向けた新たな挑戦とその構想を、この度、明治大学教育会講演会では、両校の学校経営にあたられてきた佐藤淳一先生から直接ご講話をいただけることとなりました。このような機会に参加させていただきましたことに、教育会の一会員として心よりお礼を申し述べさせていただきます。

さて、10年前の発災の同じ時刻、石巻市雄勝からは遠く離れたこの首都圏でも、これまで経験をしたことのない極めて強い地震、さらには高いビルさえも緩い周期で揺れている様子を目にし、私は何事が起こったのかと想像もできなかったことを覚えています。その日は金曜日で、私は定例の校長会に出席しておりました。会議の最中でしたが会長からは「これはただ事ではない。急いで自校に戻り対応にあたるように」と指示をうけ、全校長は自校への道を急ぐことになりました。私も自校に戻り、まずは各学級担任に各生徒の保護者との連絡をとらせ、同時に校舎際や通路での落下物の危険度が低いことを確認したうえで、全校生徒を校庭に移動させ、地域別の教員引率による下校を指示しました。全生徒の帰宅完了確認は、午後5時をすでに過ぎていました。また、帰宅のできる教職員には帰路に十分気をつけて帰宅するよう指示をしていました。すると区の災害対策課から防災無線による連絡が入り、区内各校は体育館を帰宅困難者に向けた避難所として開設するようにとの指示がありました。本校でも校長である私を含め男性教員数名が学校にとどまり、学校評議員である地域の町会長・自治会長にも来校いただき、緊急避難所の開設にあたりました。本校では、生徒、教職員、地域の方々による「合同避難所訓練」を毎年行っていたので、避難所開設の作業は速やかに完了しました。避難者用毛布や大型の暖房バーナーも難なく用意し、夜通し待機はしていたのですが、区民の方々は無事に帰宅できたようで、本校の避難所に足を運ぶ帰宅困難者はありませんでした。しかし翌日以降も続く「電車の運行制限」や「計画停電」、「ガソリン不足」などの緊急事態が数日続いていたことは、

まだ記憶に新しいことかと思えます。

しかし、巨大津波に襲われた石巻市雄勝では、そのような生やさしい世界とは全く異なるすさまじい世界がはじまっていました。佐藤先生の著書『たくましく生きよ』^{※1}の第1章では、「3月11日、雄勝の町が消えた」と表現されています。

同書に述べられている現地の様子、またその後力強く立ち上がり学校再建に立ち向かっていく生徒達との感動的な取り組みは、涙なしに読むことのできない記録の数々です。パソコンはもとより学校の資料は全て流されている中で、安否確認のための全て漢字による全校生徒の「手書きの生徒名簿」の作成には、雄勝中学校の先生方の能力にも驚かされました。また4月21日の学校再開にあたり、ぜひ「全生徒の上履きを下駄箱に用意し、生徒を迎えてあげたい」という思いから、先生方のご努力で一人ひとりの生徒のサイズに合った上履きをすべて用意し、登校初日を迎えたという先生方の細やかさにも感動させられました。また佐藤先生は、森林公園での避難所炊き出しの様子を、「自分だけよければよいという人はいなかった。実に整然としていた」と語っています。「改めて人間のたくましさ、強さ、そして優しさを知った」とも語っておられます。

私は、世界を飛び交ったあるメールについてのコラム記事を思い出しました。震災の直後、カリブ海のバージン諸島にいた元世界銀行副総裁であった西水美恵子氏のもとに、深夜、電話が入ったそうです。東京に出張していた元部下の女性からで、震える涙声で震災直後の日本の様子を元上司である西水氏に伝えました。「ミエコの国の人たちはすばらしい…。強い余震が来る中で…、みんなまわりの人を思いやり…、助け合っている…」と。さらにその後、ワシントンに戻った元部下から西水氏のもとへ1通のメールが転送されてきたとあります。そこには「今、このメールが世界銀行やIMFはもとより、世界中を駆け回っている」とありました。それが87頁の「日本から学ぶ10のこと」です。今日、それは道徳教材・資料としても使われていますが、佐藤先生がお感じになったことと同じ思いを、世界中の人々も伝えあおうとしたのだと思っています。^{※2}

さて、震災から学校再建への行程を先生は、3つの段階で想定したと語っておられます。発災から4月21日の学校再開までの間の「怒濤と奔走期」、次に学校再開から同年6月までの間の「他力再生期」、そして7月からはいよいよ自ら未来に向けて歩み出す「自力再生期」と位置付けました。雄勝中学校の先生方にとって、実に明解で具体的な学校経営指針であったと思います。その中で仕上げである第3期の「自力再生期」では、生徒が自信をつける「雄勝復興輪太鼓」への取り組みと、震災による学習不足を補う「たく塾」開塾が中心の課題と位置付けられました。家をなくし、親を亡くし、不便な避難所暮らしを強いられた3年生にとって、数ヶ月後に迫る高校受験は待ったなし。「たく塾」の命名は、「たくましく生きよ」の校訓から命名されたそうです。大学生ボランティアや様々な団体による支援を支えに、生徒達は確実に力を獲得してきます。また佐藤先生は折ある毎に、「7月からは、自らの足で歩かなければいけない」と各先生方や生徒達に呼びかけていたそうです。生徒たちは、その「たく塾」での学習と「雄勝復興輪太鼓」の練習をとおし、見事に成長し、自信を高めていくこととなります。しかし佐藤先生は成長していく生徒た

ちに、時をおかずに次の新しい課題である「山」を用意します。それは、津波によって無残な姿をみせる雄勝中学校校舎を前にした「感謝」と「鎮魂」のための太鼓演奏、あるいは5泊6日の「日本一の修学旅行」の実施などでした。いつ取り壊しになるかわからない校舎を前にした「復興への祈りを込めた魂の演奏」は、生徒にとって辛い課題解決でもあったのだと思います。このように生徒と一緒に一つの山を登れば、また次の山も力強く乗り越えていく、という佐藤先生の新生・雄勝中を目指した教育実践は続くのです。

ここで明大教育会の取り組みを一つ紹介させていただきます。福島県の双葉町は東京電力福島第一原発事故により全町避難をせざるを得ず、事故後9日後には、さいたま市のさいたまスーパーアリーナへの避難をすることになりました。さらに全町避難は、役場機能を含めた避難として埼玉県旧県立高校の校舎に移すこととなります。前例のない集団避難をまえに受け入れ側となる加須市では、入居用教室の1000枚の畳を3日間で準備をし、春休みにあたる高校生や大学生は率先して入居所となる教室の掃除、そして1000枚の畳の運び入れなどを担当してくれたと聞きます。

そこで本教育会からも、私と堀越悠紀夫事務局員（当時）が、同避難所で月1回の学習ボランティアを1年間させていただいたくこととなりました。2011年9月24日（土）の初回から翌年の8月19日（日）までの約1年間、私たちは月1回、避難所である旧県立騎西高校校舎（埼玉県加須市）に通い、入居者のお子様の学習ボランティアにあたらせていただきました。参加者のほとんどは小学生でしたが、ときには保護者や就学前のお子さんも参加してくださり、意欲的な雰囲気の中にも和やかな学習会とすることができました。私が勤務していた中学校もボランティア活動の盛んな学校でしたが（明大教育会紀要・第4号「中学校における生徒会活動(笹子)」）、東京から埼玉県北部の加須市まで生徒を引率することは難しく、私はその様子を全校朝礼や生徒会朝礼で伝えることとしました。すると生徒会では「東京に住んでいる私達にできること」として、募金活動を計画してくれました。彼らは毎朝の登校時のほか、運動会当日には生徒が作成した「呼びかけパネル」を受付脇に設置し、未だに続く悲惨な情報や数々の感動を伝える情報を、来校してくる保護者や地域の方々にも訴えてくれました。善意の総額は70,832円に至り、区をとおし被災地に送らせていただきました。生徒としては、精一杯自分達でできることを考え、実践してくれたものと思います。

さて、雄勝中学校はまさに怒濤の1年を乗り越えた翌年の3月、ついに独日協会の招きによるドイツでの「雄勝復興輪太鼓」演奏に向かうこととなります。佐藤先生の教育姿勢に魅せられた多くの支援者の方々を常に大事にする佐藤先生ご自身のお人柄、また先生が最強のスタッフと自慢してやまない教職員の皆さんとの信頼関係、そして常に生徒のことを第一に考えている佐藤校長先生の指導を心から慕う生徒さん達による、まさに偉業であったのだと思います。

先生は、雄勝中学校を去られ7年間の行政職を経た後に、新設校の初代校長として新たな学校づくりに関わっていくこととなります。先生の講演の最後に、この新設の錦ヶ丘中学校で展開する「笑顔あふれる最高の学校」づくりの構想と実践をお示しくさせていただきました。

「被災」も「新型コロナ」も経験された数少ない校長として佐藤先生は、「逆境こそが学びのチャンス」と語られました。逆境は学びの好機と捉え、次々とアイデアを示し前進していく先生の教育姿勢を、私たちは学んでいかなければなりません。逆境とまでは言わないまでも、私たちは日々、数々の困難に出合います。その時、好機と立ち向かっていくのか、後ろを向いてしまうのか、私達は日々問われているのかもしれませんが。先生の姿勢こそ、私たちは心にとめておかなければなりません。先生のご講演をとおり、学ばせていただいた「逆境こそ学びの好機」。私はこのことをこれからの指導や生き方の糧としていくことで、佐藤淳一先生へのお礼とさせていただきますと考えています。

本当にありがとうございました。

- ※1 佐藤淳一『たくましく生きよ』 株式会社ワニブックス
佐藤淳一『奇跡の中学校』 株式会社ワニブックス

- ※2 資料 日本から学ぶ10のこと

10 things to learn from Japan (日本から学ぶ 10 のこと)

- ① The Calm (平静)
悲痛に胸を打つ姿や、悲嘆に取り乱す姿など見当たらない。
悲しみそのものが気高い。
- ② The Dignity (威厳)
水や食料を得るためにあるのは、秩序正しい行列のみ。
乱暴な言葉や、無作法な動作など、ひとつとしてない。
- ③ The Ability (能力)
例えば、驚くべき建築家たち。ビルは揺れたが、崩れなかった。
- ④ The Grace (品格)
人々は、皆が何かを買えるようにと、自分に必要なものだけ買った。
- ⑤ The Order (秩序)
店舗では、略奪が起こらない。路上では、追い越し車も警笛を鳴らす車もない。
思慮分別のみがある。
- ⑥ The Sacrifice (犠牲)
50人の作業員が原子炉に海水をかけるためにとどまった。
彼らに報いることなどできようか？
- ⑦ The Tenderness (優しさ)
レストランは、値を下げる。無警備のATM(現金自動受払機)は、そのまま。
強者は弱者を介助する。
- ⑧ The Training (訓練)
大人も子供も、すべての人が何をすべきか知っていた。
そして、すべきことをした。

⑨ The Media (報道)

崇高な節度を保つ速報。愚かな記者やキャスターなどいない。
平静なルポのみがある。

⑩ The Conscience (良心)

停電になった時、レジに並んでいた人々は、品物を棚に戻して静かに店を出た。

※元世界銀行副総裁 西水美恵子さんの毎日新聞の寄稿(平成25年2月10日)

日本の伝統・文化に関する教育推進資料 平成27年1月(東京都教育庁指導部指導企画課)